

中学校社会科歴史的分野における地域素材の活用に関する研究
—神奈川県文化財を事例にして—

永江甲斐

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究方法

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 地域素材を活用する意義

第1節 地域素材を取り扱う意義

第2節 文化財の指定をうけた地域素材の
活用の意義

第2章 学習指導要領上における地域素材の
位置づけ

第1節 1947年～2017年までの学習指導
要領の地域素材に関する位置付け

第2節 1947年～2017年までの学習指導
要領の地域素材に関する位置付け
の分析

第3章 文化財の定義と神奈川県の文化財の
分析

第1節 文化財の定義と種類

第2節 神奈川県の文化財の地域と時代の
分類と分析

第3節 神奈川県の文化財の種類と時代の
分類と分析

第4節 神奈川県の文化財の種類と地域の
分類と分析

第4章 中学校社会科歴史的分野における地
域素材を扱った授業実践例の紹介と
分析

第1節 神奈川県の地域素材を扱った授業
実践例の紹介

第2節 授業実践例の考察と分析

第5章 神奈川県の鎌倉時代に対応した文化
財を扱った授業の構想

第1節 神奈川県の鎌倉時代に対応した文
化財を題材とする授業構想

第2節 神奈川県の鎌倉時代に対応した文
化財を題材とした授業の留意点

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献・論文・URL

2. 問題の所在と研究の目的と方法

(1)問題の所在

2017年告示の中学校社会科の学習指導要領によると、身近な地域の歴史学習に文化財や文化遺産などを活用していくことが重要視されているが、中学校社会科歴史的分野においては通史であることから、文化財・文化遺産などの現地調査などが行われず、教科書の網羅的・注入的な学習が行われ、学習方法に偏りがある。教科書の網羅的・注入的な学習に偏りが生じるのを防止する上で教師や生徒にとって身近な地域素材の活用は重要性がある。

本研究を進めるにあたり、筆者は以下の3点を中学校社会科歴史的分野における地域素材活用の問題点として考える。

一つ目に地域素材の種類が多く、活用方法が整理されていない課題である。地域素材の教材化と一言でいっても史料や歴史的建造物、遺物、遺跡等種類が多岐にわたり、それらの種類に応じた具体的な活用方法が明らかになっていない。

二つ目に歴史的建造物や遺物といった地域素材を基に、地域教材として活用したフィールドワークや授業展開を行うために、限られた時間の中でどれだけ効率的に地域素材を活用していくことができるかという課題がある。

三つ目の課題として生徒の歴史資料に対する興味や活用の経験が十分にされていない点である。生徒が歴史資料に関心が低い、若しくは、活用の場面が十分に準備されていないため、歴史の授業で資料に積極的に触れていく機会がとれていない。歴史の授業で関心の持てる教材を作り出す工夫を模索する必要がある。

(2)研究の目的と方法

本研究の目的は、中学校社会科における地域

素材の意義や活用方法を明確にしていくものであり、神奈川県文化財の指定を受けた地域素材を対象として行う。

一つ目に文化財の指定を受けた地域素材を選択した理由について述べていく。

文化財を活用することで、歴史を読み取る上で科学的に物事を考えていくための根拠をもつことができる。また、地域の歴史の特色と日本全体の歴史を関わらせ、当時の生活や時代背景と現代の生活に「つながり」をもたせることができる。

二つ目に神奈川県を選択する理由について述べていく。

神奈川県は神社、寺院、遺跡、歴史ある港等、数多くの歴史的な地域素材があり、鎌倉幕府やペリー来航の地など歴史の中心、転換地としての一面を持つことから重要である。

次に研究の方法について述べていく。

1 つ目に、地域素材の活用意義、地域と関連付く文化財の活用意義の 2 点について調べる。

2 つ目に、1947（昭和 22）年～2017（平成 29）年までの学習指導要領上の地域素材の位置づけに関する記述を読み取り、地域素材が教育現場で、どのように変化をしていったのかを調べていく。

3 つ目に、神奈川県文化財を地域別・種類別・時代別の 3 視点から文化財の数を分析し、特徴を明らかにしていく。

4 つ目に、1989 年 1 月号 NO.437～2018 年 12 月号 NO.888 までの過去 30 年間分の『歴史地理教育』と神奈川県立総合教育センターHP 内を「神奈川県内の中学校で神奈川県の文化財を活用した歴史の授業」という条件のもと調べ、「目標」、「内容」、「資料の活用」の 3 視点から分析し、特徴と課題を明らかにしていく。

以上 4 つの方法から明らかにされた特徴や課題をもとに神奈川県の文化財を活用した中学校の歴史的分野の授業を構想していく。

3.研究の概要

(1)第 1 章 地域素材を活用する意義

第 1 章第 1 節では、中学校社会科歴史的分

野における地域素材の活用意義を明確化した。

生徒にとって関心の持てる事象であり、歴史の一般的概念や知識を導き出せる補助的役割を果たせるものとして、身近な地域の具体性をもった資料を通じ、地域と日本全体の歴史を結び付ける意味としても地域素材の活用の意義がある。

第 2 節では、中学校社会科歴史的分野における文化財指定を受けた地域素材の活用意義を明確化した。

日本全体の歴史学習に具体性を帯びさせるために地域の歴史を関連付け、同心円的に学習を構成していく際、教師や学習者の生活に根付いた地域素材を用いることで歴史を身近に感じ取り、学習者の関心の向上につながる。文化財と指定される身近な地域素材の活用は、地域と日本全体、それぞれの歴史のつながりの媒介となる。

(2)第 2 章 学習指導要領上における地域素材の位置づけ

本章第 1 節では、1947（昭和 22）年～2017（平成 29）年までの中学校学習指導要領における文化財指定を受けた地域素材に関する目標と内容、内容の取扱いの変遷を表にした。尚、中学校学習指導要領歴史的分野の目標において文化財指定を受けた地域素材に関する記述は見当たらなかったため、内容と内容の取扱いに関わる記述のみ表に作成した。

第 2 節では、第 1 節で作成した地域素材の位置づけの変遷を示した表を分析した。その結果、以下の特徴を見出した。

目標に関しては、文化財指定を受けた地域素材に関する記述がなかったが、内容・内容の取扱いに関しては、1958 年以降、共通して全ての内容が郷土の史跡や遺跡、文化財などの地域素材の活用が留意されている。また、遺跡や史跡などといった身近な文化遺産を調査し情報を吸収したり、具体的に歴史像を理解したり、文化遺産を尊重し愛護する精神を育んだり等、学力の三要素の育成するために文化財の活用には重要な意味がある。

(3)第 3 章 文化財の定義と神奈川県の文化財の分析

本章第1節では、文化財の定義と種類について述べていく。

文化財は我々の生活や環境と古くから結びつき又は歴史上及び学術上などにおいて価値の高いものを指し、「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物」、「文化的景観」、「伝統的建造物群」の6つに大きく分類される。

第2節では、神奈川県にある文化財の「地域と時代」を分析・分類し、表にまとめた。

この分析により以下のことが指摘できる。

神奈川県に存在する文化財は計1113点、古代～現代まで、各時代に少なくとも1点は文化財がある。一番多い時代は、鎌倉時代の文化財であり、325点(29.20%)と全体のおよそ三割を占めている。一方で、最も少ない時代は先土器時代・高麗・唐・北宋・明・新生代第三紀中新世・中新世の中頃・新生代第三紀新鮮紀、時代をまたぐもので縄～古墳・弥生～古墳と計10もの時代が一点ずつ(0.09%)であった。

次に地域の視点から分析した結果、以下のことが明らかになった。

一番多く文化財が存在している地域は横須賀三浦地域で395点(35.49%)と全体の3割超であった。395点の内、およそ半数にあたる185点が鎌倉時代のものである。一方で、神奈川県の六地域の内、最も文化財の数が少なかった地域が川崎地域で計49点(4.40%)であった。

第3節では、神奈川県にある文化財の「種類と時代」を分析・分類し、表にまとめた。

分析した結果、以下のことが指摘できる。

一番数の多い種類は登録有形文化財で255点(22.91%)であった。登録有形文化財は江戸時代～平成時代まであり、その中で最も数の多い時代は昭和時代の94点であり、昭和時代の文化財の計99点の内のほとんどを占めている。一方、一番数の少なかった種類は登録有形民俗文化財で1点であり、時代は不明であった。

第4節では、神奈川県にある文化財の「種類と地域」を分析・分類し、表にまとめた。

分析の結果、以下のことが指摘できる。

一番文化財の数が多地域は、横須賀三浦地

域で395点(35.49%)であり、その内訳は多い種類順に彫刻73点、古文書等60点、工芸51点となっている。一方で、一番文化財が少ない地域は川崎地域の49点(4.40%)であり、内訳は多い種類順に建造物18点、工芸・無形民俗文化財・史跡がそれぞれ5点ずつであった。

地域・時代・種類別に分析した結果、横須賀三浦地域の鎌倉時代の彫刻の文化財が最も多い。また、川崎地域は文化財が最も少なく、文化財の内訳では、建造物が最も多いことが明らかになった。

(4)第4章 中学校社会科歴史的分野における 地域素材を扱った授業実践例の 紹介と分析

本章第1節では、先行実践の紹介をした。先行実践の調査方法は、1989年1月号NO.437～2018年12月号NO.888までの『歴史地理教育』と神奈川県立総合教育センターHP内を「神奈川県内の中学校で神奈川県の文化財を活用した歴史の授業」という条件のもと調べた。紹介した実践内容は「大磯宿の打ちこわしをどのように教材化したか」、「登戸研究所で学んだ中学生」、鎌倉時代、ペリー来航である。

第2節では、紹介した先行実践を目標・内容・方法の3視点で分析した。以下は分析した結果、指摘できる成果と課題点である。

まず、成果について述べていく。いずれも身近な地域に根付く文化財で、有形文化財である。それぞれが当時の形や様子を残した状態で保存されており、歴史を学ぶ上で正確な情報を読み取ることができる。歴史学上価値の高い文化財が身近な地域に存在し、我々の生活と結びついていることに「驚き」を生じさせ、学習内容に興味をもたせることもできている。また、文化財の提示方法にも特徴がみられる。いずれも視覚的に情報を読み取る活動として活かされている。絵画や画面として複数の資料を同時に提示することができ、当時の人々の生活の様子、地域や時代の異なる資料の特徴が比較しやすくなる。

次に、課題について述べていく。文化財を実際に見学する場面がないということであ

る。「登戸研究所」の見学では、平和の重要性や歴史を身近に感じたことなど、活動を通して学んだことが「生徒の心に刻まれる」という成果を出している。しかし、フィールドワークは時間や距離的な課題が生じ、「登戸研究所」の見学時には、午前中から夕方まで、およそ終日準備されていた。フィールドワークをしやすい工夫を時間や距離の視点から考えていくとともに、身近な地域の資料をつかって人々の様子や時代背景といった特徴を読み取れる工夫を模索していく必要がある。

(5)第 5 章 神奈川県鎌倉時代に対応した文化財を扱った授業の構想

本章第 1 節では、神奈川県鎌倉時代の文化財を活用した授業を構想した。

授業構想の視点は以下の三つである。

一つ目に、第 1 章・第 2 章では、地域に残る文化財の活用によって、現在の生活や地域の特性と歴史とのつながりを時代的な背景や環境など具体的に関連付け、「思考・判断・表現など」の能力を育成することができることが明らかになったため、授業構想時には「思考・判断・表現など」の育成をねらいとする。

二つ目に、第 3 章では、神奈川県にある文化財の内、鎌倉時代に対応する文化財が最も多く、神奈川県の文化財、計 1113 点の内、325 点と全体の約 30%を占めている。文化財の種類を見ても鎌倉時代に対応した文化財は絵画や彫刻など計 15 種ある内の 12 種が揃っており、他時代と比較して最も種類が豊富であるため、鎌倉時代の文化財指定を受けた地域素材の活用を構想する授業に組み込んでいく。

三つ目に、第 4 章では、「中世の日本」の実践例より、絵画の「一遍上人絵伝」と彫刻の「円応寺初江王像」といった種類の異なる文化財が 2 点活用されている。しかし「円応寺初江王像」だけでなく「東大寺南大門金剛力士像」といった奈良の鎌倉仏教の彫刻も使われており、地域の歴史の特性の一つである鎌倉仏教について、神奈川県の地域素材をより豊富に資料吟味し活用することができないかという課題がある。この課題を克服する点で、鎌倉時代の文化についての授業を構想していく。

目標は「鎌倉文化と鎌倉仏教の特徴を時代背景と関連付けながら、絵画や彫刻等といった資料から読み取った情報を根拠に考え、自分の言葉で表現することができる。(思考・判断・表現力等)」、学習内容は「鎌倉を中心とした武家政権」、使用した資料は「東大寺南大門の金剛力士像」(奈良)と「称名寺の木造金剛立像」の写真、「平家物語」、「一遍上人絵伝」、「おどり念仏と一遍」、「鎌倉大仏」、「ワークシート」である。

第 2 節では、構想した授業の留意点を述べた。使用されている資料は絵画や彫刻、史料等といった様々な種類が準備されており、思考の根拠となる情報をそれらの資料から読み取るため、「技能」を育成する要素も含まれている。

「技能」で読み取った情報をもとに「思考・判断・表現」をすることは一連の流れであるが、あくまでも本時は「思考・判断・表現等」の育成を目標としているため、読み取った情報を適切に取捨選択する判断力から得た根拠をもとに、考え表現する機会を重視する必要がある。

4. 今後の課題

今後の課題として、以下のことを述べる。

第 4 章で分析した 4 つの先行実践の内、実際に現地調査を学習内容に組み込んでいる例は一つであった。授業構想では、神奈川県 6 地域の内、一番多くの地域に接する横浜地域の文化財を活用し、距離・時間の課題の軽減に試みた。しかし、神奈川県全域で行う場合、写真やデジタル教材に加工することで準備がし易いことや他時代や他地域の資料との比較がしやすいため、写真での提示を採用した。全地域で現地調査を授業に組み込める工夫を模索していく必要がある。

また、1989 年 1 月号 NO.437～2018 年 12 月号 NO.888 までの『歴史地理教育』と神奈川県立総合教育センターHP から先行実践を調べていったが、4 つの実践しか分析する事ができなかったため、他資料にも先行実践を調べていく必要がある。